

# 2009年度会長報告

## 会長の任期を終えて

雨宮慶幸（東大・新領域・物質系）

2009年9月末で会長の任期を終え、下村理前会長から引き継いだタスキを尾嶋正治次期会長に託しました。会期の変更に伴い2年9ヶ月にわたる変則な任期で、率直なところ長かった！という感もありますが、この間の評議員の方をはじめとする会員の皆様のご協力に改めて感謝致します。

任期中、以下の5つの柱を活動方針として掲げて学会運営を行って来ました。

1. 他学会との連携強化
  - ・放射光科学における先端性と裾野の広がり両立を目指す
  - ・他学会へ—先端性の情報発信
  - ・他学会から—裾野の広がり情報受信
2. 新しい放射光科学の推進（含：次期光源計画の推進）
3. 若手研究者の育成
  - ・奨励賞の継続・発展（周知徹底）
  - ・「若手を中心とした研究会」の開催
4. アジア・オセアニアの放射光科学のリーダーシップ
  - ・「アジア・オセアニアフォーラム」(AOFSSRR)の継続・発展
5. 放射光施設のハブとしての役割強化
  - ・CompetitionとCooperationのバランスを保つCommunicationの場としての役割強化（3C）

いずれの活動方針も基本的にはこれまでの学会執行部が陰に陽に掲げてきた方針だと言えます。各幹事の尽力と熱意により具体的には下記のことを行いました。山本雅貴行事幹事による「若手ワークショップ」、「若手研究会」及び「基礎講習会」の開催。櫻井吉晴編集幹事による単行本「放射光ビームライン光学技術入門」の出版。繁政英治渉外幹事によるWEBページの充実、Synchrotron Radiation News (SRN)等を通しての海外への情報発信、学会創立20周年記念事業の開催。澤博会計幹事には前執行部から引き続いて2期にわたって幹事を務めて頂き、執行部の連続性の確保と確実なる財政収支の執行ができました。そして、百生敦庶務幹事には、学会創立20周年事業を始め、執行部の潤滑油として地味ながら重要な様々な仕事をして頂きました。各幹事の皆さんに改めてお礼を申し上げます。

2009年1月に行われた年会・放射光科学合同シンポジウム（@東大・本郷キャンパス）では、学会の創立20周年記念事業（式典とシンポジウム）を行い、放射光科学を

推進する上で本学会がこれまで果たしてきた役割、そして、今後果たしていくべき更なる役割の大きさを放射光科学のコミュニティの内外にアピールしました。また、この機会は、放射光科学の持つ学際性、国際性、先端性、社会性（産学連携）という特徴が、単なるアピールのための看板ではなく、文字通りの実質を伴った際だった特徴であることを改めて確認する機会となりました。

次期光源計画の議論に関しては、任期中には特に大きな動きはありませんでした。下村前会長の時代に策定した「先端的リング型光源計画に関する報告書」が生きています。しかし、そろそろその後の進展を反映させて、次期光源計画についての学会としての考え方をアップデートするべき時期に来ているかと思います。

アジア・オセアニアフォーラム（AOFSSRR）に関しては、下村前会長と高田前庶務幹事の引き続きの尽力によりほぼ定着してきました。来る12月には上海において第4回ワークショップが開催される予定です。また、AOFSSRRの活動の一つの柱であるケイロンスクール（Cheiron School）も今年で3回目を迎え、同じくほぼ定着してきました。高田、下村両氏をはじめ関係者の尽力に感謝します。それと同時に、これらを今後定常的に発展・継続させるためには、学会としてのより組織だった取り組み方が必要になるかと思います。

任期を終えた今、初期に抱いていたことがどの程度行えたかを振り返ると、東大・新領域の研究科長の任期と重なっていたこともあり、私自身がもう少し軽いフットワークで動ければ、もう少しできたのでは、との忸怩たる思いがあります。やり残したことは、このような思いも込めたタスキと共に尾嶋正治会長に託したいと思います。

放射光科学は学際的ですので、常に学会の中に多様な考え方が併存します。Organized Diversityという語がありますが、この語が表す状態は放射光科学のコミュニティのあるべき姿を適切に表現していて、先端性と幅広い裾野の両方を兼ね備えた発展状態であると思います。森羅万象の存在様相もまさにOrganized Diversityであり、top downとbottom upがバランスした科学技術の発展にとって必要な状態であると考えています。

尾嶋会長のリーダーシップの元で本学会がOrganized Diversityの状態を保ち、益々放射光科学の発展に貢献することを期待しています。

---

## 2009年度幹事報告

---

### 庶務幹事を終えて

百生 敦 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)

3年前に両宮前会長から庶務幹事の依頼をいただいたとき、実際かなり躊躇を覚えました。歴代庶務幹事の先生方と比較してとても適任とは思えなかったからですが、私なりに務めを果たすように努力しようと結局お引受けいたしました。この度なんとか原田新庶務幹事に引き継いでいただけただけのところ、これまでに少し振り返ってみたいと思います。

極めて活動的であった当時前執行部から我々が受け取ったボールはかなりの剛球でした。学会の年度区切り変更と会費値上げといった重い議題を引き継ぎ、年明け早々の年會に諮るという具体的なミッションがスタートでした。会員の皆様のご理解により無事承認いただき、いよいよ両宮会長のもと船出を切ったという印象を強く記憶しております。学会の年度区切り変更承認は、我々の任期が暫定期間9か月が加わった2年9か月となったことを意味していましたが、学会のあらたな地固めを進める上ではよかったです。

庶務幹事の定常業務としては、評議員会、年會および幹事会の運営、選挙、奨励賞公募・選考補佐などがあります。その他、必要に応じて各種規則の改訂、名誉会員、男女共同参画協議会関連の仕事がありました。行事幹事が実現に向けて奔走した若手研究会と基礎講習会にも関わりました。

若手を育てる放射光学会の重要行事として、今後も続けられていくことを期待します。

これに加えて、我々の任期中に本学会が創立20周年を迎えるということで、創立20周年記念事業の企画・実施にも深く関わらせていただきました。2009年1月に記念式典を執り行ったことは記憶に新しいと思いますが、その1年半前より企画委員会を組織して事業内容について議論し、準備を行っておりました。庶務幹事として反省点は多数ありますが、恙無く20周年記念事業を終えられ、次の10年へ踏み出す勢いが得られたと信じます。

懸念があるままボールを次に渡すことになった事柄もあります。学会は会員の会費によって成り立っていることは言うまでもありませんが、残念ながら会員数は増えておらず、むしろ減少傾向にあります。今後何らかの対策が必要と思われる。この課題は現執行部に引き継がれることになりましたが、皆様およびその周辺の方々が活発に活動していただけるよう、学術団体としての日本放射光学会がより一層発展することを望みます。

最後になりますが、至らぬ庶務幹事を導いていただいた両宮会長はじめ各幹事の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。また、日々の活動を支えていただいた事務局の佐藤さんと西野さんに深く感謝申し上げます。

---

### 行事幹事を終えて

山本雅貴 (理化学研究所)

皆様のご協力により、この9月末で無事に学会行事幹事の任期を終了することが出来ました。今回は、学会の会計年度の変更に伴う2年9ヶ月という変則的な任期で、その担当初期は不慣れなことが多く任期終了までが非常に長く感じられました。しかし、こうして任期を終わってみれば苦勞も忘れ一瞬の出来事のように感じられます。行事幹事として、日本放射光学会年會・放射光科学合同シンポジウム(以下年會・合同シンポと略す)の開催と、若手育成を中心に学会行事を担当してきました。

2008年の立命館大学・びわこくさつキャンパスでの第

21回年會・合同シンポでは、当地での初めての開催にも拘わらず太田実行委員長・難波プログラム委員長および実行委員のご尽力により573名の参加者を得て成功裏に開催ができました。また、2009年の東京大学・本郷キャンパスでの第22回年會・合同シンポは、学会20周年記念式典を開催するため、会期を4日間に延長しました。安田講堂での20周年記念式典および年會・合同シンポの20周年特別企画「日本放射光学会の20年の歩みと放射光への期待」や、Winick先生(SSRL)による20周年特別講演など盛りだくさんの内容で、620名という過去最大の参加者

で盛大に20周年を祝うことが出来ました。これは、尾嶋実行委員長・柿崎プログラム委員長および実行委員のご尽力によるものと大変感謝いたしております。

また、若手研究者への放射光利用の啓発と潜在的な放射光ユーザーの拡大を目標に、2009年から新たに若手研究会と基礎講習会を企画しました。若手研究会は、若手研究者が中心となって、放射光科学をどのように展開していくのかを考える公募形式の研究会で、第1回若手研究会には矢代会員（東大）提案の「X線ナノ集光技術研究会」が採択され、8月に大阪大学・吹田キャンパスで成功裡に

開催されました。一方、基礎講習会は初心者に向けた放射光基礎教育の充実を目指した講習会で、第1回は9月に東京大学・本郷キャンパスにおいて「先端研究開発ツールとしての放射光利用術」を開催し、参加者からも「有意義だった」と評価を頂きました。次年度以降も、若手研究会と基礎講習会を継続して頂きたいと思っております。

最後になりましたが、任期中は、会長・他幹事・評議員・行事委員・事務局ならびに会員の皆様には大変お世話になりましたことを深く感謝いたします。

## 編集幹事を終えて

櫻井吉晴（高輝度光科学研究センター）

2007年1月から2009年9月までの2年9カ月間、編集委員、学会事務局、そして会長と各幹事に支えられながら編集幹事（「放射光」編集長）を無事に務めることができました。この3年弱の期間の仕事の内容を整理しますと、(1)学会機関誌「放射光」の編集・発行（年6回）、(2)単行本出版、(3)特別企画「検出器シリーズ」の3つを挙げることができます。

「放射光」の編集にあたっては、年度によって多少異なりますが、(1)先端基礎研究、(2)次世代光源、(3)産学連携（産業利用、産業界の視点）、(4)実用性、(5)国際的視点、(6)放射光リテラシー、などをキーワードとした記事を掲載してきました。記事は基本的に編集委員2名による査読を経た後に掲載されています。私の任期中に欠かさずことなく「放射光」を発行できましたのは、約30名の編集委員会メンバーの真摯な査読作業と事務局の佐藤亜己奈さんによる手際良い調整作業の結果であります。また、執筆者の方々には、査読者からのコメント等に労を厭わず対応して頂きましたことに、大変感謝しております。

放射光学会で初めての試みとなる単行本の出版を行いました。この単行本「放射光ビームライン光学技術入門～はじめて放射光を使う利用者のために」出版の成功は、編集者の大橋治彦、平野馨一両氏をはじめ執筆者の多大なる努力の結果であります。販売促進において、評議員、編集

委員による働きかけが大きな助けになりました。また、各放射光施設には研究会・講習会等での宣伝協力、ユーザーあるいはスタッフ向けのバルク注文を頂きました。当初500部出版を予定していましたが、会員の皆様のご理解により予想を上回る売れ行きで最終的には1200部の出版になりました。企画当初、本事業の赤字は許されない状況でしたが、2009年9月の時点で若干ですが黒字になっており、安心して現執行部へ引き継ぐことができました。

特別企画「検出器シリーズ」は、岸本俊二、田中義人両氏の多大なる査読・編集努力により進められてきました。これは、「放射光」の編集方針の「(4)実用性」をより具体化した企画で、放射光実験で不可欠なX線検出器について実用性を前面に出した記事内容で連載してきました。今後、このシリーズをベースに単行本としてまとまることを期待しています。

また、当初、放射光と電子の相互作用に焦点を絞った連載基礎講座を検討していましたが、編集幹事の力不足により実現できなかったことは心残りであります。

最後になりますが、「放射光」を通してお付き合い頂きました会員の皆様、各方面で支えて頂きました編集委員、会長および幹事、評議員そして事務局の皆様にあたためまして感謝いたします。

---

---

## 渉外幹事を終えて

繁政英治 (自然科学研究機構 分子科学研究所)

最近学会事務局から届くメールの数がめっきり減ったという事実から、学会執行部の一員としての役目を終えたことを実感する今日この頃、久しぶりに事務局から来たメールをワクワクして開いてみると、この原稿の催促でした。思い起こせば、会計年度の変更と会費の値上げという学会の定款の改定が必要になる極めて重要な事項や、学会として初の試みとなる単行本の出版という大仕事を、前執行部から引き継ぐ形で2007年1月に発足した両宮執行部でした。そのような大役を仰せつかった執行部の渉外幹事としての任期は2年9ヶ月。学会員の皆様のために一体どれ程の貢献が出来たのかと自問自答すれば、過去二回の「渉外幹事この一年」同様に反省の弁ばかりになってしまいます。しかし、既に新しい執行部体制がスタートした今、同様の拙文でスペースを埋めるのは些か気が引けます。ここでは、任期中に感じたことを手短かに記します。

渉外幹事を務める前年度から評議員に選出されていたので、上記の重要事項が評議員会で議論されていることは承知していました。次の執行部は大変だろうなあと評議員会の席で漠然と思っていたのを鮮明に覚えています。広島で開催された第20回年会・合同シンポが我々のデビ

ューとなった訳ですが、前の執行部体制で決まった次年度予算や重要事項について、評議員会と総会で責任を負われる立場に突然置かれる印象があり、かなり違和感を持ちました。勿論、引き継ぎや事前の打ち合わせを行っているので心の準備は出来ていましたが、この時の総会で承認された、学会の会計年度の10月からへの変更により、そのような状況は改善されました。とても良い判断であったと思います。

渉外幹事の任期中、特に充実感、達成感のあった仕事としては、1) Synchrotron Radiation News (SRN) への年会・合同シンポ開催報告の掲載、2) 20周年記念事業における連絡係としての役割、の二つが上げられます。苦労話を書けば際限がありませんが、渉外幹事を務めさせて頂く中で、多くの素晴らしい出会いがありました。このような貴重な機会を与えて下さった両宮前会長に心から感謝致します。至らぬ私を叱咤激励し続けて下さった旧執行部のメンバーと、多方面でお世話になった西野さん、佐藤さんを始めとする事務局の方々に感謝の意を表すと共に、尾嶋新体制の下で放射光学会が益々発展することを祈念して拙文を閉じさせて頂きます。

---

---

## 会計幹事を終えて

澤 博 (名古屋大学)

前執行部から数えると学会幹事として4年9ヶ月がたち、無事に(?)幹事の任期を終えました。執行部の一員として放射光科学を見る機会を得たことは幸甚でした。アジア地区における放射光施設の在り方、各国の思惑や政治思想など様々な観点からの物事の捉え方に触れられたのは得難い経験でした。我が国における放射光ユーザーは、その放射光施設数/ビームライン数と運営方法の洗練さによって、自分たちの学問や技術に関することだけに限って考えることが許されているようです。しかし、国家規模の大型施設である以上、その運営や将来構想は限定されたコミュニティのみ議論を任せることができないわけではありません。この受け皿としての学会活動はもはや日本国内の調整

だけに限られず、アジアや世界の情勢を見つつ展開すべきでしょう。実際、中東地区における我が国の政策による種は現地の人たちに勇気と希望を与えており、これからの10年間に大きく影響するであろうと感じました。一方で、内外の政治的な運営に携わるためには、国内における研究成果も世界トップクラスでなければなりません。これは学問分野だけでなく産業界における寄与も忘れるべきではありません。現在のように世界規模の不況によって、多くの企業が苦しい状況の中で、学会としてまた学問分野として常に夢と希望を排出することは我々の義務であると思います。また、施設建設や拡張のための技術革新はやはりこれを支えてくれた多くの企業の献身があったお蔭です。

放射光を用いた成果が何らかの形で経済効果を生むような仕掛けについても目を配るべきですし、近視眼的なやりくりで将来の芽をつぶすべきではないでしょう。このような放射光施設を利用するコミュニティの取りまとめ役としての放射光学会のあり方について、今後も緻密な議論を重ね

て頂くことを期待いたします。最後になりましたが、幹事としての技量と度量の至らなかった点を支えてくださった皆様に厚くお礼申し上げます。私は、学会幹事、評議員ともに任期満了となりましたので、今後の更なる発展を祈念して筆を置きます。

一口メモ

### じゅずだま

アジアの熱帯地方が原産で古代にわが国に渡来した、高さ1メートル程のイネ科の多年草で、畑地などに自生し、初秋に花が咲く。雄花の穂は実の玉の上につき出、雌花の穂は玉に包まれていて、柱頭だけが首を出す。はじめ緑色をしていた実はしだいに黒色となり、最後は灰色に変化する。冬になると、この実をつけたじゅずだまがかさかさとして北風に吹かれている風景が川原や野原で見かけられる。実には穴があって、糸を通して、数珠や首輪、腕輪を作れるので、友達と遊んだ経験があることだろう。

8月末の衆議院選挙で新政権が誕生し、生活密着型な政策に舵が取られようとしていますので、少し長い目でその成果を見ようと思っています。さて、21世紀の科学技術の主要な課題は環境改善、省エネルギー、ナノテクノロジーの発展等であり、その開発のために多額な資金が投入されています。その後の製品化では、日本にはまったく天然資源がありませんので、原材料の供給をほぼ100%外国に依存しているのが現状です。そのために、関係者が世界中に出向き、購入交渉をおこなっている様子が新聞にしばしば掲載されています。私は彼らに地球人としての正しい倫理観を持って商談に望んでほしいと希望します。

(No. 90, K. Ohshima)

